

令和 2 年 6 月 4 日現在

機関番号：13501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04347

研究課題名(和文)部活動が子どもの発達に及ぼす負の影響に関する文化心理学的研究

研究課題名(英文) A cultural psychological study on the negative effects of extracurricular activities (bukatsu) on children's development in Japan

研究代表者

尾見 康博 (OMI, Yasuhiro)

山梨大学・大学院総合研究部・教授

研究者番号：20264575

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：国内外の課外活動の観察研究から、勝利至上主義、気持ち主義、一途主義、減点主義という価値観が部活集団に機能しているとの仮説が提示され、そのような背景の下で、部活動が子どもの発達に負の影響をもたらす要因を検討した。その結果、第一に、旧態依然の指導のなかには、(違法ではない)ドーピングのようなことまで実施しているものもあり、子どもたちの心身の健康が脅かされていることが示唆された。第二に、さまざまな理由で部活になじめない生徒が、やめるにやめられない事態に追い込まれることが複数の事例で示された。第三に、部活の集団としての健康度を把握するために尺度構成に着手し、4因子構造を見出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

部活内で指導者の体罰や恫喝がなされている場合、それを直接受けた生徒でなくても、不登校や自殺に追い込まれる事例を複数分析した結果、指導者の言葉を誠実に受け止める生徒ほど苦しい思いをし、自分を責めてしまう傾向が見られた。部活の指導者の多くは教師であり、自らが伝える言葉を最も重んじなければならない職業の一つであるにもかかわらず、このような事態をもたらすことには重要な意味があると考えられる。

研究成果の概要(英文)： The study examined the factors that contribute to the negative impact of extracurricular activities, which are unique to Japan (bukatsu), on children's development. First, it was suggested that sound mental and physical development of adolescent children may be neglected as some of the outdated instructional practices, such as doping (which is not illegal), were practiced even from elementary school students, from the point of view of the top athlete development. Second, it was shown in several cases that students who did not adjust to bukatsu for various reasons (including corporal punishment by instructors) were led to a situation where they could not quit from the point of view of maladjustment to bukatsu. Third, four factor structure was found by a preliminary analysis on group health performance of bukatsu.

研究分野：教育心理学

キーワード：課外活動 部活 文化 規範

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本の部活は国際的にみて非常に独特な課外活動である。課外活動であるにもかかわらず、教師が顧問となることが事実上義務づけられていたり、生徒の入部が事実上義務づけられていたりすることのほか、勝ち残りトーナメント方式が主流になっていることや、練習時間が長いことなどが挙げられる。また、学校における体罰が、部活を中心に日本のスポーツ界に根深く浸透していることについてもようやく問題視されるようになってきた。部活におけるこのような常識を相対化することによって、日本の思春期の子どもたちが抱える問題の背景を探ることができるのではないだろうか。この解明に向けて、医学や経営学といった心理学の隣接領域の観点も取り入れることが有用ではないかと考えた。そのことが、結果として、子どもたちの心身の発達に部活がどのような否定的影響を及ぼしているのかについて、多面的に明らかにすることにつながると思われる。

2. 研究の目的

昨今、日本の中学校・高校における運動部（以下、部活）の特異性はアカデミズムの世界（Omi, 2015；小野田, 2016；中澤, 2014）だけでなく、現場の教師からも、その負の側面について取り上げられている。しかしながら、部活の制度的意義や指導法の独特な問題に関して、グローバルな観点そして学問融合的な観点から論じている研究は少ない。研究代表者は平成26年度から「中学生のスポーツ指導に関する文化心理学的アプローチ」という科研費課題に取り組み、諸外国の課外スポーツ活動についての調査を実施し、日本における独自性を具体的に明らかにしてきた。そこで本研究では、これまでの知見を生かし、より多様な専門領域の観点から、部活が生徒の心身の発達や動機づけに与える負の影響過程にアプローチし、理論的、実践的示唆を得ることを目的とする。

3. 研究の方法

以下のような3つの研究班に分けたうえで実施された。

(1) 制約班：北海道のスポーツ強豪校の指導者や選手を対象に、アスリート育成の場としての部活の特徴と制約を中心にインタビュー調査を実施した。

(2) 不適応班：部活での経験が一要因となるような生徒の不適応に関する問題について、2つの側面からの分析を試みた。1つめは、部活での経験がきっかけとなって不登校となった小児科通院患者の事例を本人および母親のインタビューをもとに分析した。2つめは、愛知県の高校生が部活の経験をもとに自ら命を絶った事件をめぐる第三者委員会報告書を対象にクリティカルディスコース分析を実施した。

(3) 集団病理班：部活の集団としての健康度を測定する尺度作成に向けた調査を実施した。大学生や教師を対象に部活の問題事象についてインタビューをして得られた102項目を用い、別の大学生262名を対象に質問紙調査を実施した。

4. 研究成果

(1) 国内外のエスノグラフィー研究により、部活を取り巻く価値観として「勝利至上主義」「気持ち主義」「一途主義」「減点主義」が仮説的に提示された。

(2) アスリート育成という点でみると、学校や指導者によるばらつきが大きくなっていった。先進的な科学的トレーニングを貪欲に取り入れている部活もあれば、旧態依然の指導により、生徒の心身の発達に明らかに否定的な影響をもたらすと思われる部活もあった。後者について具体例を挙げると、陸上競技において女子選手に鉄剤投与を積極的に推奨したり、過度の減量を求めたりすることである。また、保護者やOB組織が指導者と一体となって非科学的な指導に関与したり、ときに部費や寄附による不透明なオカネの動きが見られることも示唆された。

(3) 部活の指導者による体罰や怒号による指導におびえていた対象者（当時中学生）は、徐々に学校に通えなくなり、小児科医で起立性調節障害との診断を受けることになった。部活の顧問だけでなく、担任からも部活を「気持ちでやれるだろう」と言われ、顧問に対しては「やめると言ったらと思うと怖い」という思いから退部もできず、学校にも行けない状態になった。同じ部活の部員だった双子の兄は指導者の怒号などを聞き流せていたが、対象者はその「厳しい言葉」を真に受けてしまっていた。つまり、指導者の言葉を文字通り受け取ることにより生徒が苦しめられるということなのである。このことは、高校生の自殺をめぐる第三者委員会報告書のクリティカルディスコース分析によっても示されており、指導者の言葉を真摯に受け入れようとすることで追い詰められていく様子が見えてきた。

(4) 事前に想定したとおり、社会的望ましさの影響が多くの項目に見られたが、極端な床効果、天井効果が見られた15項目を除外した上で、因子分析を行ったところ、4因子が抽出された。4因子はそれぞれ「威圧的支配」「私生活の剥奪とその苦痛」「権力濫用」「全体主義」と命名された。

(5) まとめ 現状では部活にはアスリート育成機能と生涯学習機能が併存していると考えられるが、アスリート育成機能と考えた場合、学校教育の一環ということで本来必要なオカネが表面化しにくかったりし、不健全な経理や賄賂まがいの温床になりやすく、多くの人の過度なボランティアに依存せざるを得なくなったりすると考えられた。他方、生涯学習機能と考えた場合に

は、体罰や怒号をはじめとした厳しい指導が常識化していると、卒業後も楽しむための運動といった観点はなくなり、逆に子どもを精神的に追い詰めることに無自覚になりやすくなる。そして、教師や指導者の言葉を真摯に受け止める子どもほど追い詰められやすいということが示唆されたことにより、学校教育の一環としての部活指導の大きな問題点が浮き彫りになった。

今後、部活を取り巻く価値観を日本文化の問題として部活外の側面と関連付けて検討するとともに、部活の負の側面に関する事例を積み重ね、部活健康度尺度を教師にも使えるように洗練させ、教師自らの部活指導の際のチェックリストまで発展させていこうと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 尾見康博	4. 巻 175
2. 論文標題 日本の部活の特殊性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 心と社会	6. 最初と最後の頁 115-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 尾見康博・廣瀬文哉	4. 巻 24
2. 論文標題 生徒の自主性や自発性を妨げる部活という仕組み - 退部経験者の組織コミットメントの観点から -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育実践学研究	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 3件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 太田仁・西田公昭
2. 発表標題 「部活」健康度尺度の作成 1
3. 学会等名 日本社会心理学会第60回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤根美穂・尾見康博
2. 発表標題 部活が中学生を精神的に追い詰めるプロセスに関する事例研究：Bukat suの文化心理学(5)
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 尾見康博・小野田亮介
2. 発表標題 中学生の学校自慢はなぜ部活なのか：Bukatsuの文化心理学(6)
3. 学会等名 日本パーソナリティ心理学会第28回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 榊原知美・尾見康博・石黒広昭・松嶋秀明・見世千賀子・呉宣児
2. 発表標題 周縁から日本の学校文化を捉える：文化心理学者がみた日本の学校
3. 学会等名 第9回多文化共生フォーラム（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大塚雄作・内田良・尾見康博・金子雅臣
2. 発表標題 学校現場でのハラスメント：部活動に焦点を当てて
3. 学会等名 日本教育心理学会第61回大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 太田仁・西田公昭
2. 発表標題 「部活」健康度尺度の作成 1：項目の収集と妥当性の検討
3. 学会等名 日本社会心理学会第60回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 北村英哉・尾見康博
2. 発表標題 自己卑下および他者賞賛における相互性の期待
3. 学会等名 日本グループ・ダイナミクス学会第66回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高木亮, 尾見康博, 丸山近, 塩川達大
2. 発表標題 課外活動の過去・現在・未来
3. 学会等名 日本学校メンタルヘルス学会第22回大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川野健治
2. 発表標題 部活を辞めることをめぐるディスコース分析
3. 学会等名 日本質的心理学会第15回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 尾見康博・渡辺忠温
2. 発表標題 中国における中高生の課外スポーツ指導の現状：Bukatsuの文化心理学(4)
3. 学会等名 日本心理学会第81回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 尾見康博・山崎雪奈
2. 発表標題 部活における先輩後輩規範の成立過程 Bukatsuの文化心理学(3)
3. 学会等名 日本質的心理学会第14回大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 尾見 康博	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ちとせプレス	5. 総ページ数 160
3. 書名 日本の部活 (BUKATSU)	

1. 著者名 Luca Tateo	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 139-145
3. 書名 Educational Dilemmas: A cultural psychological perspective.	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	西田 公昭	立正大学・心理学部・教授	
	(NISHIDA Kimiaki)		
	(10237703)	(32687)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	川野 健治 (KAWANO Kenji) (20288046)	立命館大学・総合心理学部・教授 (34315)	
研究分担者	太田 仁 (OTA Jin) (90549669)	梅花女子大学・心理子ども学部・教授 (34424)	
研究分担者	藤崎 達也 (FUJISAKI Tatsuya) (40710398)	札幌国際大学・観光学部・准教授 (30116)	